

## 校長先生の部屋だより

### 哲学ルームだより



この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。

今回も前回に引き続き「人格」についてです。「相手に人格を認めるのはどういう場合か。」今日はいつもの1年生がお友達を2人連れて来てくれました。

A：やっぱり言葉が通じるときです。身振り手振りでもいいけど。

B：でもこっちの星にあってあっちにはない場合、言葉が通じないよ。

C：言葉だけじゃなくて、内容、例えば感情がないと人格を認められないと思います。

—感情ってどんな感情？

A：仲良くしようというのが根本にありますから、お互いに楽しいとかいっしょにいて面白いとかいった、プラスの感情がないとダメだと思います。それがあればたとえしゃべれなくても OK です。何かで分かればいいんです。

—悲しいや寂しいではだめ？

A：それだけではダメです。その悲しみが癒される、とかいうのがなければ。

B：ライバルとか、競う関係でも友達とか仲間が成立すると思います。差が小さいということが相手に人格を認める条件です。

—つまり、相手に自分と同じものを見たとき、相手に人格を認めるってこと？

C：でも大人と子どもでは差がありすぎるよ。

A：犬と人間でも、ふつうはペットを人間の下というように見ているけれど、何か出来事があった、自分と対等に見ると言うことがあると思います。悲しんでいるときにそばにいてくれるときとか…

—その時にプラスの感情が生じるってことだね。悲しいときにそばにいてくれて嬉しい。でも君は犬に人格を認めるの？

A：う～ん。人格はヒトにだけ認めます。

C：結局生物学的人間にだけ人格を認めるってこと？

A：そう。だから犬に認められるのは人格ではなく、犬格。

—でもワニみたいな顔をした宇宙人にも人格を認めることがあるんでしょ？話がまた元に戻っちゃった。残念だけど、時間だ。また来てね。

今回は「相手の内に自分と同じものを見る」ということが出て来ました。問題はこの「同じもの」が何かということですが、これは大変難しい問題です。

